

卷頭言

30年前にクラウドを予見していた！？

徳島赤十字病院 副院長 岸本 大輝

徳島赤十字病院医学雑誌の第1巻は1996年に発刊されました。本誌は毎年出版を重ね、今回第30巻を刊行するに至りました。歴史あるjournalとなりました本誌の巻頭言を執筆させてもらえることに感謝いたします。

30年前と言えば、私が大学の泌尿器科教室に入局した頃です。教室の教授は香川征先生でした。当時、香川先生とお話しすることは畏れ（恐れ？）多かったですが、いつも為になることをお話してくださいました。その中に『症例報告の投稿を勧める話』があります。

「ちょっとめずらしい症例を担当したら調べたり勉強したりするだろ。せっかく勉強したんだから、その時に症例報告を書いて投稿しておくといい。何年か経って、また同じ様な症例を担当したら自分の書いた症例報告を読めばいい。資料なんか残していても転勤を繰り返しているうちに分からなくなり役に立たないぞ。雑誌に載せていれば図書室へ行ってその雑誌を探せば直ぐに自分の論文を見つけられる。どうだ、便利だろ。」

30年前、インターネットはまだ一般化していませんでした。図書室とインターネット上との違いはありますが、香川先生がお話しくださったことはデータをインターネット上に保存する考えである『クラウドサービス』と原理は同じです。今ではクラウドは当たり前のシステムですが、30年も前に香川先生がこうしたコンセプトをお持ちであったのは流石です。

自分が調べたり勉強したりしたことを症例報告や原著などに論文化する。そして徳島赤十字病院医学雑誌に投稿してデータを保存する。医中誌で検索すれば、その論文は直ぐに見つけられる。だからとてもお勧めです。う～ん、どう見ても二番煎じですが・・・。

時代は進み生成AIを使って論文作成ができるようになりました。しかし、そのようにして作成した論文を後に読み返しても、蘇って来る記憶はさほどないのではないでしょうか。論文作成の目的は、掲載されることではありません。本来の目的は、エビデンスを示し知見をまとめることです。最後になりますが、皆様が本誌を大いにご活用くださることを期待いたします。

